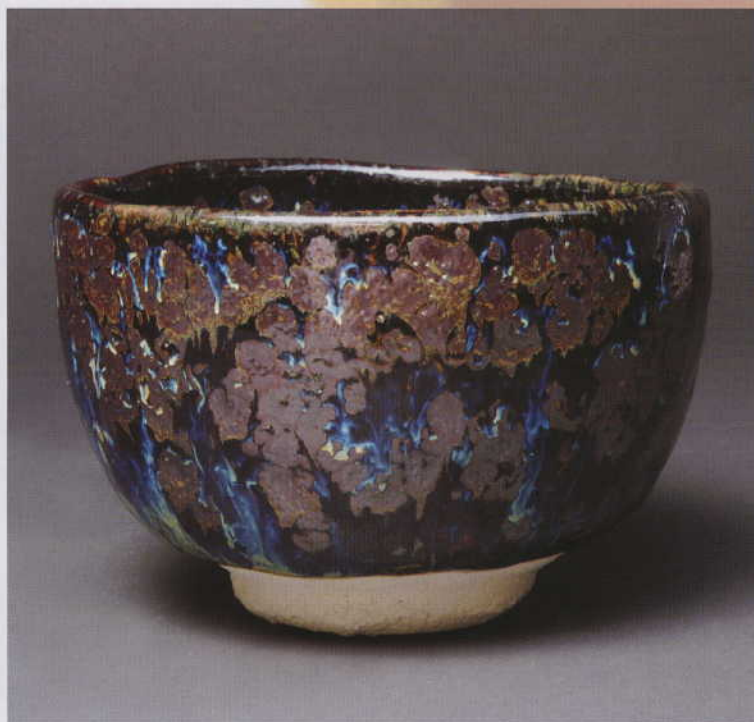


# 所 陵

No. 57

[ SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT ]



天目アンドロメダ茶盃 Tenmoku Andromeda teacup (現代)

## ● 目 次 ●

|                 |     |    |    |
|-----------------|-----|----|----|
| 晶子さんちの時計塔       | 井 溪 | 明  | 2  |
| 「鉄道博物館」を訪ねて     | 熊   | 博毅 | 4  |
| 高松塚古墳の壁画の復原     | 田村  | 唯史 | 6  |
| 「対話の広場」紙芝居の魅力   | 松永  | 友和 | 10 |
| 奈良の秋祭り ―神事と供え物― | 福井  | 英行 | 12 |
| 平成19年度購入資料の紹介   | 山口  | 卓也 | 14 |

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel. 06-6368-1171 (直通) Fax. 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/museum.htm>

# 晶子さんの時計塔

—『住吉堺名所并豪商案内記』にみる与謝野晶子生家の「時計」について—

井 溪 明

明治16(1883)年川寄源太郎著『住吉堺名所并豪商案内記』(通称『豪商案内記』、以下そう略する)で知られている明治前中期堺中心部の大店の表構えや商売の一端を描いた横長小判の銅版画帖がある。これは当時全国的にも流布し始めていた各都市の商店を中心とした案内記の一連かとも思える銅版画帖で、同年にも幾つかの都市のものが出版されている。

この『豪商案内記』に、堺の地に生まれ育った与謝野晶子の生家駿河屋も含まれており、その店構えについて些か面白く思えることがあるので書き留めておきたい。

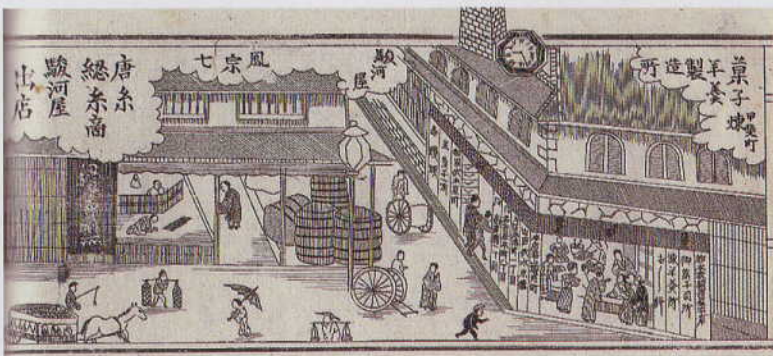
晶子の生家駿河屋は、横長画面の右頁に、「甲斐町菓子練羊羹製造所駿河屋、駿河屋鳳宗七、唐糸総糸商駿河屋出店」と紹介コメントが添えられて描かれている。真ん中の道を挟んで右の菓子店「練羊羹製造所駿河屋」の開口部には三箇所本店支店名などを記した縦形文字看板がしつらえられ、その奥に内部の様子が垣間見える。店の中では客とその応対に出る店員が描かれ大福帳らしきものも広げられている。道を挟んで南側、つまりは左側の「唐糸総糸商駿河屋出店」は糸物を扱う店で、開口部左には「総糸売捌所」と染め抜かれた布看板が掛かる。店の土間には縄で括られた荷が幾つも置かれ、左の方には結界で仕切られた帳場が置かれているが、右の菓子店の賑わいと対照的な商いの雰囲気描かれている(与謝野晶子の生家は、昭和20(1945)年の戦災で焼失し、その後の道

路拡幅などもあり痕跡をとどめてはいない。現在は、生家があった場所の西側歩道敷に生家跡碑が建立顕彰されている)。

この二つの駿河屋店先でひととき目を引くのが、菓子店の二階の屋根に乗っかるようにしつらえられた八角形の大時計である。その直ぐ左には煉瓦造りの煙突状の構造物が枠外に延びている。ローマ数字風の文字盤に、8時25分過ぎを指した針が描かれている。時計の乗っている二階部分は観音開きの洋風窓が連続し、さらに一階の軒下は石でも貼ってあるのであろうか、石垣状の壁が描かれる。案内記に描かれる100を越える当時の堺中心部の店構えの内でも、特異な店構えとして描かれているのがこの駿河屋菓子店である。なお、左のオーソドックスに描かれる唐糸店にも、店前に街灯ランプとおぼしきものが一際大きく描かれているのは目を引くところである。ちなみにこの駿河屋の情景は、近代堺を代表する郷土画家岸谷勢蔵により、より具体的に描き直されている。

さて、この菓子店の大時計であるが、平野光雄著『明治・東京時計塔記』(昭和33年10月15日・青蛙房刊)中の「文明開化と時計塔」の項に、「明治時代に時計塔機械をもっとも多く、輸入したと思われる商館は、横浜および大阪に店舗をかまえて、幕末以来、機械貿易に不断の活躍をつづけた、著名なファブル・ブランド商館(元治元(1864)年頃創業、館主スイス人James Favre-Brandt,1841-1923)である。

ファブル商館では、懐中時計は主としてスイスから輸入したが、鉄砲類・メリヤス機械・四方時計等の大形のもの、イギリスの諸会社と契約していた(ファブルの四男ハンフリー・ファブルブランド氏談)し、またファブル商館より購入した、横浜弁天通りの河北時計店の時計塔機械が、イギリス製であった(明治・大正時代の横浜の著名な時計商、若松屋(明治2年創業)二



与謝野晶子生家の図



代目店主若松治之助氏談) 事実等に徴して、同商館輸入の時計塔機械は、おそらくイギリス製であろう——したがって、私は本文で、ファブル商館輸入のそれを、疑問符はつけたが、一応すべてイギリス製と記しておいた——と考えられる。このファブル商館で、明治9(1876)年末頃に刊行した小冊子『時辰機取扱心得』は、その頃までに同商館で納入して、時計塔を設置した建物の名称を、次のように挙げている。「[東京] 本郷医学校、江戸橋郵便局、外神田京屋伊和造出店、八官町小林本店、通四丁目小林出店、上野博覧会。[横浜] 本町町会所、郵便局、高島町一ヶ所。[大阪] 区務所、鉄道寮、郵便局、外館江一ヶ所。泉州境江一ヶ所。[栃木] 栃木県師範学校。[山形] 山形県師範学校、渥美郡役所」(同本p12~13、後略)とあり、いささか長い引用とはなったが、泉州境(ママ)一ヶ所とは、まさにこの駿河屋のことではないかと考えられる。

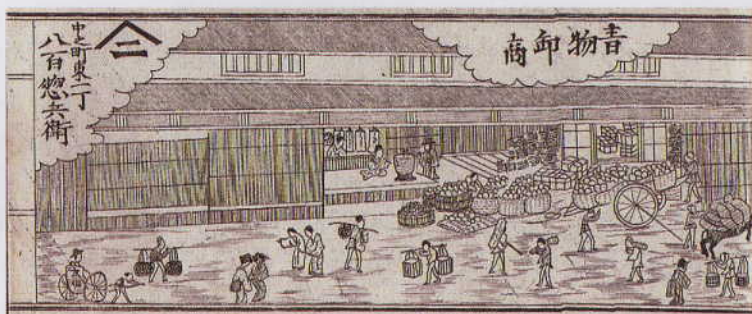
さらに、同本では、時計塔を様式的に、洋風と和風、和洋折衷とに三別し、「和風時計塔は、江戸時代以来の我が国商家の伝統的な建築様式である土蔵造りの建築に、もっともマッチした型と思われる」云々の記述が続くのである。

晶子の生家、駿河屋のこの時計〈台〉は、まさに堺の町の中心部におけるランドマーク的存在であったとも思える(堺ではこの後明治21(1888)年開業の阪堺鉄道(現在の南海本線)堺駅舎に時計がしつらえられるのが、公的なものとしては第1号となる)。

さらに穿って考えるなら、この生家、時計をはじめとして外観からして西洋的気分を取り入れた、何とも堺の町では異空間とも言えるような場所ではなかったろうか。これは、晶子の父宗七の趣味によるところであったのかどうかは、定かではないが、少なくとも堺・駿河屋の気質の中に、明治維新以後の西洋化の波がいち早く堺の地で取り込まれたという証を見ることが出来るであろう。そのことは、時計が取り付けられた2年後の明治11(1878)年にこの家に生まれ、この図が描かれた頃は物心がついていたであろう晶子をして、古い堺の因習から抜け出してゆくための助走を準備していたのでは

ないかとも思える。ちなみに後年短歌に目覚める晶子が、明治29(1896)年に入会した堺敷島会の主事をしていた真鍋台鎮なる歌人の生業は時計屋であった。堺の町人たちは、この時計台について、更に晶子さんの生家の雰囲気について、どう感じていたのか、残念ながら今のところ文献的な記録は見いだせていない。

ちなみに『豪商案内記』を細見すると、時計が描かれる堺の商家町家はもう一軒、中之町大道筋の青物卸商八百惣兵衛宅で、店前に荷車や馬の背に積んでこられた青物類が所狭しと並べられる奥の帳場の後ろに大福帳と並んで8時頃



八百屋惣兵衛店の図

を指した多角形の掛け時計が見えている。

最初に述べた、同時期頃に描かれた全国に及ぶ銅版図帖では、屋内に時計が描かれる店はまま数え上げることができるが、晶子生家のようにランドマークとなるような時計台が店舗外に据えられるような例は、管見の及ぶ範囲では数件しか見出しえなかった。

時計塔の記録としては、明治27(1894)年銀座にセイコーの前身服部時計店が開店し、時計塔を作ったとされているようであるが、晶子さんちはそれを遡ること、およそ20年前に時計がしつらえられていたことになる。

通常よくいわれる晶子の持つ新進性の寄って立つところの隠れた一つが、このような生家自体の新進性にあつたのではないかと晶子研究の門外漢としては思えるのだが、さていかがなものであろうか。

なおこの『豪商案内記』を出版した川寄源太郎なる人物は、本書以外でも10篇以上の都市案内記を上梓している。そしてこの人物、大阪では明治大正昭和前期と、おもちゃ絵画家としてつとに有名であった川崎巨泉の父とも兄ともされる人物である。(堺歴史史料研究会員)



# 「鉄道博物館」を訪ねて

熊 博 毅

2007年10月14日の鉄道記念日を期して埼玉県さいたま市に「鉄道博物館」が開設された。同館は、JR東日本創立20周年記念事業のメインプロジェクトとして、財団法人東日本鉄道文化財団が建設したものである。

北九州市の「九州鉄道博物館」、大阪市の「交通科学館」、京都市の「梅小路蒸気機関車館」など、鉄道をテーマとする博物館は、国内でもかなりの数を挙げることができるが、この「鉄道博物館」は、そのなかでも最大級の施設である。

開館から10ヵ月近くが経った2008年7月末、博物館実習の一環として、数名の学生とともに同館を訪れる機会を得た。

## 3つのコンセプト

「鉄道博物館」は3つのコンセプトを持って誕生した。

第1は、鉄道システムの変遷を、鉄道車両や鉄道に関わる部品等の実物を中心とした展示を行うことで、それぞれの時代背景等を交えながら、産業史として鉄道の歴史を物語る「歴史博物館」であること。

第2は、鉄道の原理・しくみや鉄道に関する技術について、模型やシミュレーション等を活用しながら体験的に学習する「教育博物館」であること。

第3は、日本および世界の鉄道に関わる遺産・資料を体系的に保存し、調査研究を行う「鉄道博物館」であること。

## 「時空の旅」へ

東京からJR大宮駅へ行き、ニューシャトルに乗り換えて一駅、鉄道博物館（大成）駅で降りれば、そこには鉄道で埋めつくされた夢の空間が広がっていた。

「鉄道博物館」のデザインテーマは「時空の旅」である。近代から現代までの時世と、日本全国で活躍する鉄道のスケールの大きさを表す緩やかにカーブした巨大な屋根は大らかな丘陵

と鉄橋をイメージしているという。

メインエントランスへと続くアーケード状のプロムナードにはD51型蒸気機関車の先頭部をはじめ、実際の車両の台車や輪軸などが展示されている。また、床面には、東北新幹線の大宮駅・上野駅・東京駅・八戸駅それぞれの開業時と、山形新幹線の山形駅・新庄駅開業時、秋田新幹線の秋田駅開業時の時刻表が描かれている。これから鉄道博物館を訪れようとする来館者に期待を膨らませる心憎い演出だと言えよう。

## 鉄道車両の宝庫

「鉄道博物館」のメイン展示の1つであり、全体のおよそ半分のスペースを占めるのが、ヒストリーゾーンである。私も入館してすぐ、1階右手に広がるこのゾーンへ足を運んだ。

ここは「日本の鉄道の黎明期」「全国に広がる鉄道網」「特急列車の誕生と通勤輸送の始まり」「大量輸送と電化時代」「全国に広がる特急網」「新幹線の誕生」「鉄道による貨物輸送」「御料車の歴史」の8つのエリアからなり、それぞれの時代やテーマを代表する鉄道車両35輛のほか、当時の貴重な資料や、実物の車両を縮小して作った精巧な模型が数多く展示されている。

またここでは、車両のそばに設けられた階段を下りることで、いくつかの機関車の足回りを観察することができる。ピットで床下から車輪を点検する視点である。



床下から見た蒸気機関車の動輪

それとは逆に、2階のバルコニーからも見下ろすことができるため、普段は目にすることの



できない車輛の屋根部分を観察することが可能となっている。

### ターンテーブル上のC57 135号機

かつて蒸気機関車の方向を変えるため、日本国内の主だった機関区にはターンテーブル（転車台）があった。「鉄道博物館」では、ヒストリーゾーンの中央にこのターンテーブルを再現し、その上にC57 135号機を乗せている。

この機関車は、昭和50年12月14日、北海道の室蘭本線で国鉄最後の蒸機牽引旅客列車を牽いた歴史を持っている。

そして1日数回、定められた時刻になると、このターンテーブルが回転し、同時にC57も汽笛を鳴らすのである。



ターンテーブルの上で回転するC57 135号機

幼少のころ、今は亡き母とともに祖父の住む町へ乗っていった列車は、蒸気機関車が牽いていた。少し大きくなり、蒸気機関車が鉄道の主役を次世代の機関車に譲ろうとする時代、私にとっては中学生から高校生にかけてのころであるが、蒸気機関車の魅力に取り付かれた私は、その姿を追い求めて北海道から九州まで駆け巡った。ターンテーブルの上で、圧倒的な音量とともに吹き鳴らされるC57の汽笛は、そうした遠い記憶までも呼び覚ますのであった。

### 模型鉄道ジオラマ

車輛の下に潜り込んだり、上から眺めたりして堪能したあと、私は2階の模型鉄道ジオラマコーナーへ行ってみた。

このジオラマは、線路総延長が約1400mもあり、線路幅が16.5ミリのHOゲージとしては日本最大の規模を誇る。1日数回実施されるライブ運転では、スタッフによる車輛解説やエピソード紹介とともに、多種多様な列車の走行を



### 日本最大の模型鉄道ジオラマ

観覧することができる。

また、200㎡の広大なジオラマの中には約3000体に及ぶミニチュアのフィギュアも配置されている。高さ2cmほどの人形ではあるが、これらが並ぶだけで模型の街が生き生きとしてくる。

### 屋上のパノラマデッキ

地上25mにある屋上のパノラマデッキのすぐそばには新幹線とニューシャトルが走っており、反対側に目を転じると在来線の電車や貨物列車が次々と駆け抜けていく。展示物や模型ではない、今を生きる車輛を目の当たりにすることができるのも、この博物館の大きな特徴である。



パノラマデッキのそばを通過する新幹線。眼下ではパークゾーンのミニ運転列車が駆け回る

鉄道の歴史を学び、鉄道の原理やしぐみ、技術を理解した上でこのパノラマデッキに立つと、現役の鉄道車輛が入館する前とは違った感覚で見えてくるから不思議である。

### 今後の展開

私たちが「鉄道博物館」を訪れたのは夏休み期間中ということもあって、館内は親子連れの来館者で大賑わいであった。

2階のラーニングゾーンでは車輛工作体験のイベントが実施されていたし、人気のSL運転シミュレータは早々に予約で一杯となっていた。開館後初めて迎える夏休みであるため、こうした大盛況は喜ばしいことであるが、今後とも夢を与え続ける「鉄道博物館」であってほしい。子どもたちの歓声に包まれる博物館をあとにしながら、私はそんな想いを抱いていた。



# 高松塚古墳の壁画の復原

田村唯史

関西大学では2008年7月5日に高松塚古墳壁画再現展示室竣工記念として来村多加史先生（奈良文化女子短期大学教授）と米田文孝先生（関西大学教授）による講演会『高松塚古墳壁画を探る』が行われた。それに伴って高松塚古墳の壁画の復原を行った。

## 復原の手順

復原は以下の手順で行った。

- ①線描画を作成しそれをパソコンに取り込む
- ②消えている線の復原
- ③色付け

線描画の作成にあたっては来村先生の作成した図をパソコンに取り込みデジタルデータ化し、同先生の指導のもと、カビの繁殖により消えてしまった線を復原した。色付けに際しては高松塚壁画館で作成・展示されている復原図をもとにし、来村先生、米田先生の指導のもと色見本を用いて高松塚古墳の壁画制作時の色を復原した。

## 四神図の復原

高松塚古墳には陰陽五行説に基づいた各方角を統べる四神図がそれぞれの壁面に描かれていた。すなわち東壁には青龍、西壁には白虎、そして北壁には玄武が描かれていた。しかし南壁には朱雀は描かれていなかった。朱雀図が描かれていたと考えられる位置には盗掘孔があるため朱雀図は盗掘により剥がれ落ちたと考えられる。四神図の復原にはキトラ古墳の四神図を基

本として、薬師如来像台座の四神図、四神八卦十二支鏡の四神図を参考資料とした。

青龍図…東壁に描かれた龍の図。比較的よく残っていたが高松塚壁画館の壁画検出時に模写された図を基本とし、壁画検出時に詳細の不明であった羽とみられる朱色の部分や後ろ足と尾の交わり方は白虎図を参考に復原した。

朱雀図…高松塚古墳の南壁には朱雀はなく、それは南壁上面の前端の部分に開けられた盗掘孔によるものだと考えられる。今回はキトラ古墳の朱雀を参考に省略の手順を考慮に入れ尾の縞模様の数を省き、朱雀を復原した。

白虎図…西壁に描かれた虎の図。高松塚古墳とキトラ古墳、ともにほぼ完全な形で残っていたので両者の比較が可能となった。復原作業としては前足の一部を復原するのみであった。キトラ古墳の白虎図と比較すると縞模様が極端に省略されており頭から尾までの縞模様がキトラ古墳の白虎図が23本であるのにたいして高松塚古墳の白虎図は17本しかない。そして朱色が塗られている爪等色付に関しては若干の相違点がある。

玄武図…北壁に描かれていた亀蛇合体の図である玄武図は盗掘団により〔図1〕のように大部分が削られていた。復原に

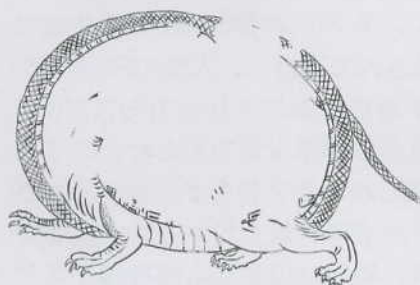


図1 北壁 玄武図

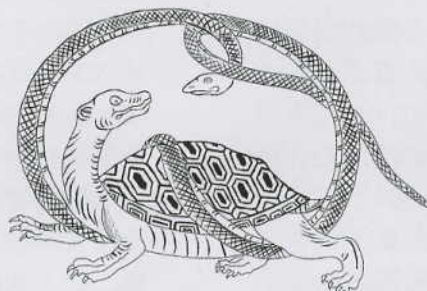


図2 北壁 玄武図 線描画



図3 北壁 玄武図 復原図



できない車輛の屋根部分を観察することが可能となっている。

### ターンテーブル上のC57 135号機

かつて蒸気機関車の方向を変えるため、日本国内の主だった機関区にはターンテーブル（転車台）があった。「鉄道博物館」では、ヒストリーゾーンの中央にこのターンテーブルを再現し、その上にC57 135号機を乗せている。

この機関車は、昭和50年12月14日、北海道の室蘭本線で国鉄最後の蒸機牽引旅客列車を牽いた歴史を持っている。

そして1日数回、定められた時刻になると、このターンテーブルが回転し、同時にC57も汽笛を鳴らすのである。



ターンテーブルの上で回転するC57 135号機

幼少のころ、今は亡き母とともに祖父の住む町へ乗っていった列車は、蒸気機関車が牽いていた。少し大きくなり、蒸気機関車が鉄道の主役を次世代の機関車に譲ろうとする時代、私にとっては中学生から高校生にかけてのころであるが、蒸気機関車の魅力に取り付かれた私は、その姿を追い求めて北海道から九州まで駆け巡った。ターンテーブルの上で、圧倒的な音量とともに吹き鳴らされるC57の汽笛は、そうした遠い記憶までも呼び覚ますのであった。

### 模型鉄道ジオラマ

車輛の下に潜り込んだり、上から眺めたりして堪能したあと、私は2階の模型鉄道ジオラマコーナーへ行ってみた。

このジオラマは、線路総延長が約1400mもあり、線路幅が16.5ミリのHOゲージとしては日本最大の規模を誇る。1日数回実施されるライブ運転では、スタッフによる車輛解説やエピソード紹介とともに、多種多様な列車の走行を



### 日本最大の模型鉄道ジオラマ

観覧することができる。

また、200㎡の広大なジオラマの中には約3000体に及ぶミニチュアのフィギュアも配置されている。高さ2cmほどの人形ではあるが、これらが並ぶだけで模型の街が生き生きとしてくる。

### 屋上のパノラマデッキ

地上25mにある屋上のパノラマデッキのすぐそばには新幹線とニューシャトルが走っており、反対側に目を転じると在来線の電車や貨物列車が次々と駆け抜けていく。展示物や模型ではない、今を生きる車輛を目の当たりにすることができるのも、この博物館の大きな特徴である。



パノラマデッキのそばを通過する新幹線。眼下ではパークゾーンのミニ運転列車が駆け回る

鉄道の歴史を学び、鉄道の原理やしぐみ、技術を理解した上でこのパノラマデッキに立つと、現役の鉄道車輛が入館する前とは違った感覚で見えてくるから不思議である。

### 今後の展開

私たちが「鉄道博物館」を訪れたのは夏休み期間中ということもあって、館内は親子連れの来館者で大賑わいであった。

2階のラーニングゾーンでは車輛工作体験のイベントが実施されていたし、人気のSL運転シミュレータは早々に予約で一杯となっていた。開館後初めて迎える夏休みであるため、こうした大盛況は喜ばしいことであるが、今後とも夢を与え続ける「鉄道博物館」であってほしい。子どもたちの歓声に包まれる博物館をあとにしながら、私はそんな想いを抱いていた。



# 高松塚古墳の壁画の復原

田村唯史

関西大学では2008年7月5日に高松塚古墳壁画再現展示室竣工記念として来村多加史先生（奈良文化女子短期大学教授）と米田文孝先生（関西大学教授）による講演会『高松塚古墳壁画を探る』が行われた。それに伴って高松塚古墳の壁画の復原を行った。

## 復原の手順

復原は以下の手順で行った。

- ①線描画を作成しそれをパソコンに取り込む
- ②消えている線の復原
- ③色付け

線描画の作成にあたっては来村先生の作成した図をパソコンに取り込みデジタルデータ化し、同先生の指導のもと、カビの繁殖により消えてしまった線を復原した。色付けに際しては高松塚壁画館で作成・展示されている復原図をもとにし、来村先生、米田先生の指導のもと色見本を用いて高松塚古墳の壁画制作時の色を復原した。

## 四神図の復原

高松塚古墳には陰陽五行説に基づいた各方角を統べる四神図がそれぞれの壁面に描かれていた。すなわち東壁には青龍、西壁には白虎、そして北壁には玄武が描かれていた。しかし南壁には朱雀は描かれていなかった。朱雀図が描かれていたと考えられる位置には盗掘孔があるため朱雀図は盗掘により剥がれ落ちたと考えられる。四神図の復原にはキトラ古墳の四神図を基

本として、薬師如来像台座の四神図、四神八卦十二支鏡の四神図を参考資料とした。

青龍図…東壁に描かれた龍の図。比較的よく残っていたが高松塚壁画館の壁画検出時に模写された図を基本とし、壁画検出時に詳細の不明であった羽とみられる朱色の部分や後ろ足と尾の交わり方は白虎図を参考に復原した。

朱雀図…高松塚古墳の南壁には朱雀はなく、それは南壁上面の前端の部分に開けられた盗掘孔によるものだと考えられる。今回はキトラ古墳の朱雀を参考に省略の手順を考慮に入れ尾の縞模様の数を省き、朱雀を復原した。

白虎図…西壁に描かれた虎の図。高松塚古墳とキトラ古墳、ともにほぼ完全な形で残っていたので両者の比較が可能となった。復原作業としては前足の一部を復原するのみであった。キトラ古墳の白虎図と比較すると縞模様が極端に省略されており頭から尾までの縞模様がキトラ古墳の白虎図が23本であるのにたいして高松塚古墳の白虎図は17本しかない。そして朱色が塗られている爪等色付に関しては若干の相違点がある。

玄武図…北壁に描かれていた亀蛇合体の図である玄武図は盗掘団により〔図1〕のように大部分が削られていた。復原に

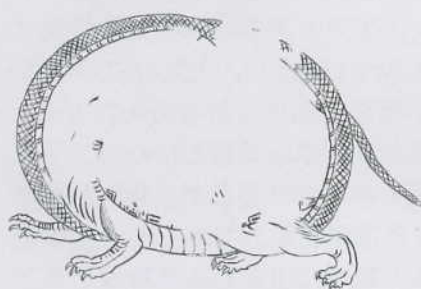


図1 北壁 玄武図

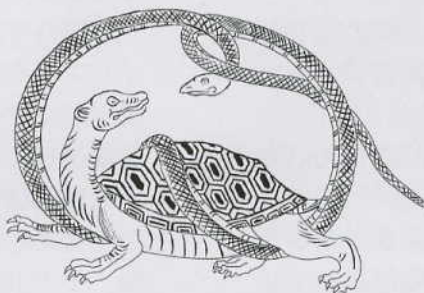


図2 北壁 玄武図 線描画



図3 北壁 玄武図 復原図



際してはキトラ古墳の玄武図を基本とし、そのほか上述した資料を参考にし、首の角度や甲羅等、残っていた線から推測し、足りない亀と蛇の顔の部分で復原した。

### 人物群像

人物群像は全体としてよく残っていたが顔の部分が判然としないものが多くあった。そのため、目や鼻など顔の部分が残っている像を参考にして、各人物の残っている線とあわせて表情を復原した。持ち物に関しては残りがよかったために推測が容易であり、線を少し足すのみの作業であった。

### 日月像図

天文図と同じ天井面に日像、月像が描かれていたキトラ古墳とは異なり、高松塚古墳では東壁の青龍図の上に日像図が描かれており西壁の白虎図の上に月像図が描かれていた。日像図には金箔が、月像図には銀箔が貼られていたが、鎌倉時代に受けたとされる盗掘により剥がされ

ており、中に何が描かれていたのか詳細は分からない。中国の墳墓の例を考えると日像図には三本足の鳥、月像図には蟾蜍（ヒキガエル）と兎（ウサギ）、不老不死の実をつける樹が描かれていたことが推測される。キトラ古墳壁画にもその樹の一部とみられるものがみられる。そのことから復原に際しては来村先生の指導のもとに日像図には三本足の鳥を入れ、月像図には蟾蜍と兎、月に生える樹を入れ、復原した。

### 星宿図

高松塚古墳の天井には二十八宿とよばれる星座が描かれていた。キトラ古墳のように黄道や赤道、内規や外規のようなものはなく二十八宿のみを表現した図であった。石室解体により新たな星も検出され、1972年の壁画検出当初は存在しないといわれていた北斗七星の存在が確認されたが、場所を間違えたためか金箔を貼りつけてただけで朱線は結ばれていなかった。そのために、今回の作業では壁画製作者の意図を考えて、場所の異なる北斗七星は復原しなかった。高松塚古墳の二十八宿は中国の南宋淳祐石

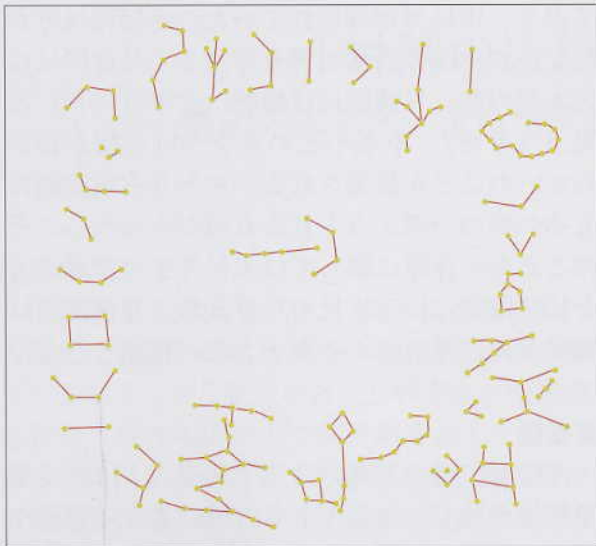


図1 東壁 男子群像



図2 東壁 男子群像 復原図





星宿図

刻天文図や朝鮮半島の天象列次分野之図二十八宿と必ずしも一致しないので、今回の作業では高松塚壁画館が復原した二十八宿を参考にした。

### 色付け

色付けに関しては、高松塚壁画館にある高松塚古墳壁画検出時に行われた日本画家らによる模写を基調とし、来村先生や米田先生の指導のもと壁画検出時ではなく壁画制作時の色調の復原をめざして行った。色付けに際して高松塚壁画館にある高松塚古墳の壁画検出時に模写さ



月像



白虎



朱雀



西壁 男子群像



西壁 女子群像





日像



玄武



青龍



東壁 女子群像

れた図の色を参考にしながら、古墳が築造された8世紀初頭の顔料を考慮し、色を付けていった。たとえば玄武の蛇の部分や青龍のうろこ、人物像のスカートなどからラピスラズリが検出された。このことから色調が壁画検出時より鮮やかで、よりきらめいていたと考えられる。また人物像の上衣については当時の服飾規定を参考にし、復原した。しかし明らかに服飾規定に含まれない上衣を着ている人物、すなわち黄色の上衣を着ている人物については検出時の色を参考にしながら制作時の色を復原した。一方技術的な問題で日月像図や星宿図の金箔、銀箔を表現することは困難な作業であった。印刷の関係とコンピュータの問題で金色や銀色の表現は難しく、金は山吹色で表現し、銀は灰色に近い色で表現した。

今回の復原作業では、各先生方、壁画検出に関係された方の意見や指導のもと、8世紀初頭の壁画が製作された当時の色使い、人物像の表情の再現をめざした。またこの復原に関して、大阪府立近つ飛鳥博物館の平成15年度秋季企画展「壁画古墳の流れ 高松塚—キトラ」および同企画展図録『壁画古墳の流れ 高松塚—キトラ』を先行研究として、玄武図の首の角度や青龍図の後ろ足の角度などを参考にして復原を行った。



東壁 男子群像



# 「対話の広場」紙芝居の魅力

—第5回ワークショップ「紙芝居は楽しいぞ！」を通じて—

松 永 友 和

## はじめに

平成20年5月28日（水）、関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターの主催で、第5回ワークショップ「紙芝居は楽しいぞ！」が開催された。現在も街かどで紙芝居を演じている、鈴木常勝氏を講師としてお招きした。第1部では紙芝居の魅力についてご講演いただき、第2部では、キャンパス内で紙芝居の実演を行った。ここでは、ワークショップ当日の様子や、アンケートにみる参加者の「声」について紹介をしたい。

大阪府立大学・大阪府立大学文化遺産学センター・大阪府立大学文化遺産学センター主催  
ワークショップ「紙芝居は楽しいぞ！」（平成20年5月28日）  
なにわ・大阪文化遺産学研究センター

第5回ワークショップ

**紙芝居は楽しいぞ！**

平成20年5月28日（水）

《第1部》10:40～12:10  
講演：鈴木 常勝氏「紙芝居屋がやってきた！」  
会場：関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター1F 文化遺産実習・展示室

《第2部》12:10～12:40  
鈴木常勝氏による紙芝居の口演  
会場：関西大学博物館前（雨天の備も園内いたしよす）

※参加自由です  
主催 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター



鈴木氏の似顔絵の入ったチラシ

## ワークショップ当日の様子

ワークショップ当日の5月28日は、幸い雨天の予報が外れ、5月にしては少し汗ばむ陽気となった。

今回お招きした鈴木常勝氏は、1972年に大阪で紙芝居を始め、現在も住吉公園や長居公

園、平野の全興寺などで紙芝居を演じている。『紙芝居は楽しいぞ!』（岩波ジュニア新書、2007年）や『紙芝居がやってきた!』（河出書房新社、2007年）、『メディアとしての紙芝居』（久山社、2005年）などの著書もある。



紙芝居について熱く語る鈴木常勝氏



鈴木氏の講演に目を輝かせる学生たち

第1部は、センター1階の文化遺産実習・展示室において、鈴木氏に「紙芝居屋がやってきた!」と題して、ご講演いただいた。紙芝居をはじめるきっかけや実演での苦労話をはじめ、アジア（中国・ネパールなど）の街かどで紙芝居をしたときの体験談などをご披露していただいた。鈴木氏の魅力ある語り口に、文学部の「知へのパスポート」受講生らが熱心に聞き入っていた。鈴木氏は、「これまで紙芝居を続



けられたのは、子どもたちに支えられてきたからだ」という。この言葉は私にとって、今でも印象に残っている。

第2部は、関西大学博物館前の広場に場所を移し、拍子木の音とともに紙芝居を語る鈴木氏の声が響きわたった。紙芝居には付き物の水あめやせんべい、かたぬきが配られ、学生たちは馴染みのないお菓子と格闘しながら、紙芝居に見入っていた。

おそらく、関西大学の敷地内で本格的な紙芝居が行われたのは、今回がはじめてであろう。紙芝居を演じている鈴木氏の周りには半円を描くように何重にも人だかりができた。また、第2部は昼休みの時間帯ということもあり、キャンパスを往き交う多くの人びとも足を止めて、紙芝居に見入っていた。

私が印象に残ったのは、紙芝居を見ている人びとの表情やそのときの雰囲気である。鈴木氏の「語り」に惹きつけられ、ときに真面目に、ときに笑いも交えて、真剣に紙芝居を見ていた。紙芝居を演じる者と受けとめる側、この両



博物館前の広場で行われた紙芝居



水あめを練りながら紙芝居を見る学生たち

者が一体となって調和し、言葉では表現しきれない「紙芝居空間」がうまれたのだと思う。

鈴木氏は、「紙芝居は対話の広場」だと言う(『紙芝居は楽しいぞ!』155頁)。さらに「紙芝居はライブ」であり、「語り手のアレンジが紙芝居の魅力」とも述べている。テレビなどとは異なり、対話によってつくりあげられる紙芝居は、昭和期における日本の庶民文化であり、現在においては貴重な「文化遺産」である。私はそのことを、今回のワークショップを通じて実感することができた。

### 参加者の「声」

最後に、アンケートをもとに当日参加された方の「声」を紹介したい。

- ・街頭で実際に見たことがないのに懐かしい思いがしました。私が幼い頃には近所の子同士で遊ぶことはめったにありませんでした。紙芝居屋さんが来ればそういうことも増えたのだろーと思います。今でも充分に楽しめたので、当時は夢中になったらうと感じました。(女子・学生)
- ・今回初めて紙芝居を見ましたが、一つ一つの話にストーリー性があり、とてもおもしろかったです。紙芝居というのが子どもに与えるものは大変大きいように感じました。(男子・学生)
- ・とてもよかったです。(ビデオで紹介されていた)紙芝居を見ている子供たちの表情がとてもキラキラしていて楽しそうだったので、私も紙芝居を見て育ちたかったです。テレビよりも紙芝居の方が好きだ、という子供たちの言葉はとても感動的でした！(女子・学生)
- ・紙芝居が、地域にとってとても重要な日本文化だと思いました。(男子・学生)
- ・地域社会の活性化につながるというのが、とても印象的でした。(女子・学生)
- ・今、紙芝居屋さんの人数が少ないことはとても残念です。この良さを他の人にも知ってもらいたいです。(女子・学生)



# 奈良の秋祭り

— 神事と供え物 —

福井英行

奈良県では現在でも多くの神事や、その時に  
出されるお供え物がある。それぞれの村に伝  
わってきたものであり、特に奈良県の国中とよ  
ばれる大和盆地部分の狭い地域を見てもそれぞ  
れに特色がある。

御所市川合の川合八幡宮では毎年10月10日  
に「ひきあい餅」の儀礼が行われる。「ひきあ  
い餅」とは藁を編んで作ったコグツ（写真1）  
とよばれる袋の中に餅を入れて、それを取り合  
うというものである。かつては16個の餅をコグ  
ツに入れて取り合いをしていたが、取り出し口  
の小さい所に多くの人が殺到し、けが人も出た  
ことから中止されたが、昭和60年に小餅を作り  
行事の後に配布するという形で復活している。



写真1 神殿前に供えられるコグツ

祭りに参加しているのは奉膳、<sup>ぶんぜ</sup>水泥、<sup>みどろ</sup>川合の  
三つの垣内で、頭屋はそれぞれの垣内の持ち回  
りで勤めている。午後8時頃、三つの垣内の一  
行が垣内の名前の入った高張提灯と、ススキと  
よばれる2種類の提灯（写真2）を持って神社  
に集合する。このとき奉膳からは上・下の二つ  
から提灯が出されるため、全部で8つの提灯が  
来る。かつては到着した垣内から神社に入っ  
ていたが、現在は鳥居前で伊勢音頭を歌いなが  
ら待機し、水泥、川合、上奉膳、下奉膳の順番  
で宮入りをする。宮入りすると、高張提灯は社  
殿前に、もう一つの提灯は石段下に据えられる。



写真2 鳥居前まで来た提灯

社殿前での神事後、石段の前で男性2人が  
相撲を取る。相撲は3回勝負するが、3回とも  
四股を踏み両手を突き、立ちあいの呼吸があっ  
た時点で両者勝ちとなり終了する。相撲が終  
わると「ひきあい餅」の儀礼となり、夕方に山  
車に乗せられ集落を回り、その後、神前に供え  
られていたコグツを石段から下に落とす。落ち  
たら下にいる人が担ぎ神前に持って上り、再び  
落とす。これを4回繰り返す。その後子供たち  
がコグツに付いている綱を引っ張り、境内を回  
る。コグツの中の餅を奪い合うという行事はな  
くなくなったが、それに代わるものとして子供たち  
への餅を配布し、ごくまきが行われ終了とな  
る。

五條市久留野の御霊神社の秋祭りでは宮座が  
中心となって運営されている。宮座とは水利な  
どの資格をもつ家、または特別な資格はないが  
定員制で組織され祭りをを行う祭祀組織のことで  
ある。現在、座を構成するのは63軒の氏子で、  
毎年1月6日のとんどの日に座員が集まりくじ  
を引き、その年の本頭屋を1軒、相頭屋を2軒  
決める。本頭屋が中心となって神事を勤め、あ  
との2軒は手伝いとして相頭屋となる。もし決  
定後に本頭屋に不幸事があったときは、相頭屋  
の一軒に代理を務めさせる。



10月1日に一日座が行われ、集落内にある御霊神社から頭屋宅に神を遷す「オワタリ」があり、このとき頭屋宅では庭先に「オオダン」と呼ばれる神を祀る施設を作る（写真3）。



写真3 頭屋宅の庭につくられたオオダン

オオダンは、周りを竹矢来で囲み、中央には竹を2本立てて芝土をマミズルと呼ばれる蔓草で巻く。手前の竹に神を迎えて来た櫛を挿し、後ろの長いほうの竹に番傘を立てる。頭屋の家に神が来る1日から祭りの当日まで、頭屋は毎日お供えをするなどの世話をしなければならぬ。また村人がお参りに来ることもある。

10月の第3日曜日の祭り当日には、本頭屋宅の床の間では祭に使われる日の丸御幣、金幣、スコと呼ばれる底のない一升杓にワラを入れそこに鶴、亀、三日月をかたどった餅、みかん、なすを差し込んだもの（写真4）を本頭屋と相頭屋それぞれひとつずつ合計3つ作る。シャコと呼ばれる米麴等も飾られる。午後2時から頭屋宅から神社へ「オワタリ」が行われる。



写真4 餅、なす、みかんのお供え

頭屋宅から猿田彦、獅子頭、五色の絹がついた櫛、金幣を持った本頭屋、日の丸御幣を持った娘、スコ、シャコ、神輿の順に本頭屋の家を



写真5 久留野のススキ

出発し、相頭屋の家を回って神社に向かい、神事をする。またここでも神社にススキとよばれる提灯が置かれる。（写真5）

檀原市膳夫町<sup>かしわて</sup>の三柱神社の秋祭りでも宮座があり、かつては「御假宮」と呼ばれる久留野のオオダンのような神を祀る施設を作っていた。現在は頭屋の家そのものを「仮屋<sup>かりや</sup>」と呼び、床の間に祀っている。ここでの神事も神を神社から頭屋宅に迎え、祀り、再び神社に送るという他の祭りとは変わらないものであるが、お供えものは「百味<sup>ひゃくみ</sup>」（写真6）と呼ばれ、多くの種類の野菜、果物等をお供えするという珍しいものである。これは『檀原市史』などにも載っておらず現地に行ってはじめて発見したものである。



写真6 百味

このような祭りの儀礼やお供えものなどを調査していると、財政的な問題や過疎などから、簡素化あるいは一部を廃止してしまっているところが非常に多くなっていることがわかる。

久留野や川合でも出ているススキと呼ばれる提灯も、五条や御所周辺では見られるが、少し北の檀原、桜井では見ることはできない。また百味と呼ばれるものも膳夫だけでなく談山神社や橘寺でも作られていることから、関連があると思われる。このような興味深いテーマがあるのに、研究されないまま儀礼そのものがなくなるかもしれないのは非常に残念である。



# 平成19年度購入資料の紹介

—日本・中国の陶磁器—

山口 卓也

平成19年度、東洋陶磁器の蒐集を続けた。中国、朝鮮、日本陶磁器の系統的蒐集を意図しているが、今回は中国・日本の天目茶碗、伊万里焼水注と皿、古清水焼茶碗組を購入している。

今回購入の天目茶碗などは、社会的、文化的、宗教的な背景をもって普及したことを伺わせる事例である。どの陶磁器を鑑賞するにしても、その陶磁器が作られた時代と場所、使われる用途と社会的な背景を考慮することが求められる。

けんさん ちゅうごくそうだい ふっけんしやうけんよう  
**建盞**（中国宋代 福建省建窯 大：高5.8cm 径12.6cm、小：高4.6cm 径10.2cm）

中国唐時代の喫茶方法は、茶葉を煮出して飲むものであったが、北宋時代には、抹茶を茶碗に入れて湯を注ぎ、混ぜて飲む点茶が、宮廷や禪宗寺院の茶礼の中心となり広まった。同時に、抹茶の良し悪しを競う「闘茶」という一種の戯が流行し、その闘茶に適した茶碗として、黒い鉄釉系の建盞（福建省建陽県建窯産の喫茶碗）が好まれ、宮廷から貴族階層、僧侶などの間で広まった。この2点は、いずれも小振りの黒釉天目形の茶碗であり、わずかに禾目が発現している。大きい方は典型的な黒灰色の素地で、小さい方は建窯では異質の灰色素地である。

**瀬戸天目茶碗**（室町時代 高7cm 径11cm）

日本国内に喫茶の習慣が広まった13世紀後半に、不足する茶器を求めて、瀬戸・美濃地域で茶碗の国内生産が始まる。禪宗の茶礼が、鎌倉幕府の保護により武家社会に浸透する14世紀後半から、瀬戸地域で「建盞」を強く意識した天目形の茶碗が生産された。この作品も建盞を写した黒釉の天目形である。16世紀には千利休（1522～91）らが、閑寂・枯淡の世界を茶室の草庵や道具類に表した「侘び茶」を開くと、瀬戸茶碗、美濃茶碗などにバリエーションが生まれ、瀬戸焼と国焼き諸窯が茶器として大きな流れを形成する。



建盞（大）



建盞（小）



瀬戸天目茶碗





**古清水焼色絵茶碗**（江戸時代 高6.5cm 径10.8cm 5点組）

江戸時代前半、野々村仁清が御室窯で、赤絵や錦手・色絵などによばれる上絵付けを代表的な技法として製作し、続いて東山山麓の諸窯でも、これに倣った作品が多く作られたものが古清水焼とされる。東山周辺では、栗田焼や八坂焼、清水焼、音羽焼、御菩薩池焼、修学院焼などの各窯でも、緑と紺、金などの釉薬で上絵付けを行った。この色絵茶碗5点組は、金と緑、紺で松と梅が枝を絡ませる様を描いており、前には松が、後には梅が金彩されている。



古清水焼色絵茶碗



伊万里葡萄文瓢箪形水注



伊万里染付鹿文皿

**葡萄文瓢箪形水注**（江戸時代後期 高16.3cm 長17.3cm）

瓢箪形の注口を傾けた水注である。くびれ上部と下部にそれぞれ房のついた飾紐が一周し、装飾された持手がつけられる。口縁には欠損を補修した金継がある。緑、紺、赤などで器面に広く絵付けされた見事な伊万里焼である。底部背面には竹組が描かれており、胴部の染付葡萄と蔓文は、棚から下がった状態を描いたことがわかる。オランダ東インド会社の注文で、ワインなどの酒器として輸出用に作られたものであろう。

**伊万里染付鹿文皿**（江戸時代 高2.3cm 径20.5cm）

伊万里港は、有田周辺で作られた陶磁器の出荷港として栄え、この港から積み出された陶磁器は、全国で伊万里焼と呼ばれた。特に江戸時代後期までのものを古伊万里とする。この染付皿には、中央見込みに様式化した樹木の茂る仙山の間で若鹿が2頭はね回る様子が描かれ、縁部には花草文を緻密にあしらっている。一般の流通品と比べて、皿の器形や釉薬、紋様の構成が緻密であり、藩窯の作品を写したものである可能性がある。



## ◆ 博物館だより

◇平成20年度春季企画展「天目<sup>そら</sup>への誘い<sup>いざな</sup>ー木村盛康陶芸展ー」を4月1日から5月18日まで開催しました。期間中、4,113名の入場者があり、盛況のうちに終了できましたことを厚く御礼申し上げます。本展は、現代の陶芸界にあって天目釉の第一人者である木村盛康先生から、関西大学へ陶芸作品の数々をご寄贈いただいたことをうけて、特別に公開したものです。



また、5月10日には、「天目の魅力」と題して、木村先生からご講演をいただきました。当日は、木村先生による菊ねり（陶芸作業のひとつ）の披露もあり、そのあざやかな手さばきに一同ひきつけられるように見入りました。

◇高松塚古墳壁画再現展示室の竣工を記念して、関西大学博物館講演会「高松塚古墳壁画を探る」を7月5日（土）に開催しました。368名の聴講者が、米田文孝先生（文学部教授）と来村多加史先生（奈良文化女子短期大学教授）の、高松塚古墳壁画にまつわる話に聞き入りました。また、この講演を機会に、考古学研究室所属の大学院生が、先生方の指導の下、色鮮やかな高松塚古墳壁画を復原し、本館ではその原図をもとにパネルを作成しました。このパネルは、講演会にあわせて6月23日から7月28日まで開催した博物館小展示会「高松塚古墳壁画の発見」で展示しました。小展示会には782名の入場者がありました。



◇平成20年度ミュージアム講座の開催

7月12日から毎土曜日に3回「関西大学ミュージアム講座」を開催しました。総合テーマを「なにわの文化遺産（三）」として、のべ105名の受講者がありました。

7月12日「近世後期大坂の出版文化」

関西大学文学部教授 山本 卓

7月19日「伝統野菜の今日的意義ー知っていますか、なにわの伝統野菜ー」

元 大阪府立食とみどりの総合技術センター主任研究員 森下 正博

7月26日「浪速の町絵師ー菅楯彦の画業とその社会的背景ー」

芦屋市立美術博物館学芸課長 明尾 圭造

◇平成20年度博物館なんでも相談会を8月1日と2日に実施しました。今年で第5回目となる相談会は、ここ数年地域の小学生や住民の方がたを対象に、体験を重視したイベントを中心に実施しています。開催を楽しみにしてくれる参加者も増え、2日間でのべ511人の参加がありました。また2日目には紙芝居の口演があり、大人も子供も水あめ片手に昭和の気配色濃い紙芝居を堪能しました。



### ．．． 編集後記 ．．．

『阡陵』第57号をお届けいたします。今号は、井溪 明氏（本学非常勤講師）、熊 博毅氏（学術センター次長）、松永友和氏（なにわ・大阪文化遺産学研究センター研究員）、田村唯史氏と福井英行氏（両名ともに文学研究科博士課程前期課程）に寄稿いただきました。ご執筆くださいました皆様方に感謝申し上げます。

表紙写真は、木村盛康先生作の天目アンドロメダ茶盤です。今春の企画展では、宇宙の深遠を表現したこの茶盤に魅せられた方も多かったのではないのでしょうか。